

児玉善仁先生を偲ぶ

著者	中里 英樹
雑誌名	甲南大學紀要. 文学編
号	166
ページ	13-14
発行年	2016-03-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1260/00001790/

謹んで

故 兎玉善仁教授のご霊前にこの論文集を捧げます

児玉善仁先生を偲ぶ

文学部教授／教職教育センター所長 中里英樹

児玉善仁先生は在職中の2015年5月16日、多くの人に惜しまれながら逝去された。イタリア教育史や大学史という専門の研究分野においても、教職教育においても、私より先生と近い教員は何人もいるが、先生の所属された文学部の教員であり、教育と組織の運営の面で深く関わってくださった教職教育センターの所長でもあるという巡り合わせから、ここに追悼の一文を捧げる。

甲南大学に着任された2012年の4月には、私自身が在外研究のために学内にいなかったため、お話しするタイミングを逸したまま、2014年に教職教育センターの所長として先生とお話しする機会を得るようになる。それからのわずか1年と少しの期間ではあるが、その日々を大きな感謝の気持ちとともに思い起こしている。

この時点ですでに大きな手術をされていたにもかかわらず、先生は通常通りの数の授業をこなされ、その間、長時間の会議にご出席いただき、またあるときはメールや教職センターの事務室での個人的な会話の中で、学識と経験に裏打ちされたさまざまなご助言をいただいた。先生には教育史、大学史において長年にわたる研究の蓄積があったが、同時に現代ヨーロッパの大学教育および教職教育に通暁し、そのうえにたって日本の教員養成のあり方に対して明確な問題意識と見通しをもっていた。そのことは、私よりはるかに長い期間、本学の教職教育に携わってきた教員たちが、本学の教職課程のカリキュラム改革に関して児玉先生に再びご尽力いただけることを待ち望んでいたことからもうかがえる。

私自身は、ご一緒させていただいたわずかな期間でも、児玉先生からたびたび力をいただいた。教職教育センターのメンバーに年齢的にも教職に関わる知識や経験のうえでもはるかに及ばないにも関わらず、所長の役割を果たさなければならぬという不安を抱えてのスタートであったが、児玉先生はいつもこちらが恐縮してしまうほど丁寧に接してくださり、勇気づけてくださった。『「持続可能な教職キャリア」支援プロジェクト』という新たな取り組みを提案した際には、ヨー

ロッパの教育におけるサステナビリティ（持続可能性）の概念との関連性に触れながら後押しをしてくださり、本当に心強く感じたことを鮮明に覚えている。

2014年度の学期中、何度か体調を崩しながらも、授業の継続を最優先し、教職を目指す学生を支え続けてくださったが、2015年の2月に再手術をして再び闘病生活に入ることになり、退職を申し出られた。授業の手当などで我々に負担をかけまいと気をつけてくださったのだろう。広島のご自宅で療養中の先生と電話でお話しして、休職の形もあるので是非療養して戻ってくださいと伝えたとこ、少しうれしそうな声で、頑張ると言ってくくださった。その声は、復帰に向けた強い意志を感じさせるものであり、半年あるいは1年間の治療に専念されたのちの復帰を私は心待ちにしていた。しかし、その数ヶ月後の5月に容態が急変し、16日に65歳にて急逝されたとの連絡を奥様からいただいた。

先生の生前のご意向で、すでに密葬を済ませられたあとに連絡をいただくことになり、お供物等もご遠慮なさっていたため、公式に先生をお送りする機会を持つてずにいた。しかし、やはりささやかなものであっても、先生を偲ぶ会を開催したいという声があがり、ご逝去のあと半年ほどがたった昨年12月、多くの人たちの協力を得て、アットホームな会を開くことになった。そこには、本学の教職員はもちろん、児玉先生に指導を受けた学生をはじめ、研究仲間など多くの方が全国から集まり、ご家族もお招きして思い出話を伺うことができた。また出席できなかった学生たちからのメッセージカードも披露された。イタリアを深く愛する先生が、研究室でエスプレッソを入れたり、一緒に旅行に出かけるなど、学生や同僚や友人仲間と語らう時間を積極的に作っておられたということ、沢山の方のお話から知ることができた。その機会をそれぞれの方がとても楽しみ、だからこそ、その機会が失われたことを深く悲しんでいることが、強く印象に残った。また力を注いでこられた『大学事典』の完成を待たずに先生が逝かれたことを嘆く声も多くの関係者から聞か

れた。このようななかでも、出席された方々がユーモアたっぷりに先生とのさまざまなエピソードを語る様子からは先生のお人柄が偲ばれ、ご家族もとてもよろこんでくださった。

お元気な頃の先生とこのような機会を持てなかったことが個人的にとっても残念だが、先生が最後の情熱を注ぐ舞台をともにできたことに感謝して、追悼の言葉としたい。